ーBegierde BeilHzー（殉欲のベディヘルツ）

FafunarV

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｌＢｅｇｉｅｒｄｅ　ＢｅｉｌＨｚｌ（殉欲のベディヘルツ）

【Ｎコード】
Ｎ９０１１Ｗ

【作者名】
ＦａｆｕｎａｒＶ

【あらすじ】
今のこの世界に
ハッピーエンドはあり得ない。

神からの報復は突如として世界を闇に落とし込めた。
未知のウィルスが蔓延、それにかかったものは人間を喰らい、
脳やあらゆる細胞に記載された記憶、感情、知識に基づいて体形を
変えてしまう。

人々はそのものをＬＥと呼んだ。
ＬＥはいつしか、人間の一番強い感情
恐怖を軸に体を変え、異形の生命体へと変貌を遂げた。
そして、誰にもその暴走を止める事は出来なかった。

これは物語の一ページ『殉欲のベディヘルツ』

紅の誓

神の裁きは人々を恐怖に陥れた。

「ＬＥを視認、これより戦闘モードに移行する。」

ＬＥ
謎のウィルスに侵された、神からの刺客。
その存在はたちまち世界に広がり、
支配者を王座から引き摺り下ろした。
人間はなす術無くＬＥに敗れ、
ついにはユーラシア大陸の９０％
北アメリカ大陸の７８％がＬＥによって占拠された。

俺は家族を奪われた悲しみを
ひたすらＬＥにぶつけていた。

ベディヘルツのパイロットとなって…

「コア捕捉、対象の殲滅を開始します。」
吹き荒ぶ豪雨の中
俺はマシンガンを打ち続けた。
日本の最期の砦
埼玉を守るために。

真っ赤な血液は雨に濡れる零番機の肌を
滑らかに滴った。

「四番機は後方の援護射撃に回れ？三番機は俺と組んで突撃、残りの三機は五番機の指示を仰げ？」
「了解？」

雨中でももろともせず炎を上げるバーニアの周りには
蒸気がもうもうと立ち込めた。

それを払い、俺は足の裏に力を込めた。

ベディヘルツの足裏のホイールが火花を散らして回転し始めた時に
はもう
ＬＥからの攻撃がこちらに飛んで来た。

左右に散開した俺と三番機の後ろで、
触手を四番機が撃ち抜く
するとＬＥは耳を割くほどの叫び声をあげて
口から人間の無惨な死骸を嘔吐した。

「三番機よりコアの位置を確認しました。」
「了解、次の敵の挙動を確認後、絶対領域に侵入、コアの破壊を開始する。」
「了解。」

ＬＥが動くのはさほど遅くなかった。
伸びた触手は地を叩きながらこちらに向かって来た。
「作戦開始…。」

三番機は腰に付いたナイフ入れを開き
ＬＥの脚部目掛けてそのナイフを放った。
ＬＥに命中したナイフに内蔵された時限爆弾が爆発し
脚の肉は全て剥ぎ取られ
ＬＥは地に伏した。

「死ね…。」

俺は斧をＬＥのコア目掛けて振り下ろした。

一瞬も静寂と共に
吹き上がった血液が雨と混ざり
一帯を紅く染めた。

「こちら大場、ＬＥのコア破壊を確認、戦闘終了。」
「こちら本部、直ちに帰投しろ。」
「了解。」

こびり付いた血の濃さほど
この世界では勲章なのだ。
生臭ければ生臭いほど
それが兵士の誉となる。

俺はそれをこの身で直に感じていた。

紅の誓

二日後
私用で町出ると深い霧がかかって居た。
ここは旧西武線の駅が有ったらしいが、駅ビルもあの日のまま時が止まった様に、整然と本や洋服が並び、埃を被っていた。

三階の一角が崩れ、鉄筋コンクリート剥き出しで町が見渡せた。
各所のビルが破壊され、人間やＬＥの死体が腐臭とガスを放っている。
霧はその死体のガスと雨の影響だ。
「埼玉…か。あまりにも変わり果てたな。」

もう五年になる。
東京にＬＥが初めて出現したあの日から。
恋人の住むあの町は地獄絵図と化し
ここよりも酷いありさまだった。
砕け散った戦闘機や戦車の残骸
ビルのコンクリートやガラス
灰色の町に塗りたくられた血液と原型を帯びない臓物
俺が見た先に人の文明はなかった。
有ったのは狂気に満ちた一匹の黒い巨神と燃え盛る炎だけだった。

「春海！！春海！！…はるみ！！、くそおおおおお！！」
俺は町に向かって駆け出した。
しかし、自衛隊はそれを止めた。
「やめなさい！！もうこれ以上犠牲者が出てはいけない！！」
「なんでだよ！！てめぇら！！…どけよぉ！！どけって！！…畜生、

どいてくれ！！」
「この町に生存者はいないっ！！立ち去りなさい！！」
「いやだ！！いやだぁ…春海…。」

もうその場所にすら行く事が出来ない。
日本は北海道の一部、埼玉、岐阜、京都、大分以外全てＬＥの領地へと変わってしまった。
安全なこの場所から一歩でも出ようモノなら、すぐにＬＥの餌食になる。

「大場隊長、ＬＥの出現予測が書き換えられました。
一時間後までにベディヘルツ零番機に搭乗、待機に入ってください。」
「了解。」

俺は直ぐに本部に戻った。
やけにＬＥの出現率が上がって居るのが目に見えてわかる。
すでに中国は壊滅、国民すら居無くなっている。
ヨーロッパ、北アメリカは一進一退の攻防戦が繰り広げられて居るらしい。

ベディヘルツはＬＥに対して最も有益な武器だった。
元々、軍用に開発されていたらしいが、ＬＥ襲撃の時、存外役に立ったため今ではベディヘルツを中核とする軍備が形成されて行った。
そのため、生き残った人間からベディヘルツを操縦出来る者を集った。

俺もその一人だ。
ＬＥを殺すため、日々皆戦闘に明け暮れた。
一人、また一人とパイロットは消えて行った。

その度ＬＥの学習能力は増強され
ついには生半可なベディヘルツパイロットは太刀打ち出来なくなった。

群馬が堕ち、山梨が堕ち、そして千葉が堕ち、埼玉に政府が移った時にはもう最初の一割以下のパイロットしか居なくなっていた。
ろくに機能しない政府を守ると言うのは大義名分であり役人の盾になるだけだった。
しかし、それは逆に高額の収入を得るチャンスだった。

俺は零番機のコックピットハッチを開き、イスに座るとＩＤの入力が要求される。

「大場賢治、入りました。」
素早くＩＤを打ち込む。
「大場機甲兵長のＩＤ認証を確認。」
ＩＤが承認されるとメインコンピュータが立ち上がり、ウィンドウに機体の情報が映る。

「システムオールクリア、ベディヘルツ零番機、発進シークエンスに移行します。」
「了解、零番機、発進シークエンスにて待機。」

生体キーである左手をウィンドウに翳すと動力源が立ち上がった。
薄暗いコックピットにはサブウィンドウにブリーフィングの映像が流れ、今日の作戦についての情報が提示される。
「ソレイユが二体だな…。」
「お待たせ隊長さん！！」
サブウィンドウが増え、芝浦の顔が映る。
「なんだ、早くその口癖が直る様に行動を迅速にすべきだぞ芝浦工

大上等機甲兵。」
「ったー！！御硬いな大場ちゃんよう！！」
「まったく…あり得ないな、お前が副隊長だなんて。」
「戦術と戦績に着いて来た結果だぜ！！お前もうかうかしてらんないぞ～。」
「遅刻野郎は上等機甲兵留まりだっ。普通ないだろ副隊長が遅刻だなんて！！」
「声荒げるなってよ…。ほいほい、頑張ってみますよーぅ。」
「それでいい。」

俺は回線を切る。
するとカタパルトが動いて輸送機に格納庫される。
「よし、行くぞ…。」

紅の誓

格納庫が開くとベディヘルツは空へと放りだされる。
「零番機射出。」
数秒もしない内にズシンという地響きと衝撃がコックピットを揺さぶる。

メインカメラに、霧の中から現れたＬＥが映る。

「こちら零番機、ＬＥを視認、これより戦闘体制に移行する。」
「了解。」
各機から戦闘体制移行の確認が入った。
「今回は零、二、四で一体、一、三、五で一体を掃討。前回同様パターンαで迎撃する。」
「了解。」
「各機！！戦闘開始！！」

三機に散開した俺達は
ＬＥ目掛けて加速してゆく。
「敵ＬＥのコアが確定出来ません！！」
オペレーターから通信が入る。
「なんだって！？」
「だいたいの位置はわかりますが常に挙動不審をやめません。」
「いい！！送ってくれ！！」
「了解しました。」

コアの位置目掛けて二番機の援護射撃を縫って俺と四番機は貫通ナイフを突き立てた。
ナイフの刃がＬＥの体内に潜り込む。

「生態反応が消えない？」
ＬＥの皮膚が割かれ、肉塊の筋肉の一本一本が触手となった。
「まずい…。」

「退け！！四番機！！」
「間に合わない！！」
バキッと四番機のスネが触手の一撃で折れる。
「うあああ！！」
と同時に二番機の射撃がＬＥの眼球に命中し
ＬＥは鮮血を吹き上げる。
「今だ！！」
四番機にワイヤーを引っ掛けて引きずる。
「四番機は待機、俺が行く。」
「ああ。」

四番機のライトが消えたと同時にＬＥが手当り次第に攻撃を始めた。
俺は軽アックスを手に取り応戦する。
「くっ、近寄れない…。」
触手を切り落とすのにも精一杯だ。
二番機の援護射撃も読まれ、徐々に命中しなくなっていった。
「大場隊長！！触手の軌道が算出されました！！」
「送ってくれ！！」
「了解しました。」
軌道には一定の規則性があるようだ。
八の字を描く軌道の中に、十数秒に一回だけ、口腔部分がガラ空き
になるアナがあった。
「よし！！襲撃を再開する！！」

アックスをしまい、非常装備のエレキランスを取り出す。
伸ばすと１０ｍもの長さになる代物だ。

「先輩！！炸裂弾で触手を吹き飛ばすので、そこに！！」
「ありがとう西園寺、行くぞ！！」
二番機の炸裂弾が触手に当たり、大爆発が起きる。
土煙の中、ＬＥの口目掛けてエレキランスを突いた。
ズブっと音がして、エレキランスがＬＥの口に刺さる。
ＬＥの動きが止まった。
「やったか？」

ＬＥの口がいきなり裂けて、中から６ｍくらいの異様な物体が飛び出て来た。
「こいつが本体…。」
「大場隊長！！ＬＥのコアはその本体の頭です！！」
ＬＥは潰れた眼球を抜いて引きちぎると、瞼の中から無数の触手が飛び出てくる。
「ちぃ…寄生型のＬＥか…。」
「先輩！！ソレイユＬＥの回復率が急上昇しています！！」
「本体の影響だ…全て回復される前にコアを叩くぞ！！」
「了解！！」

戦斧を手に取り、まだ動かないＬＥの脚目掛けて刃を払う。
高周波振動する刃がＬＥの脚に触れた瞬間スッパリと脚は斬れて、不安定なＬＥの身体は後ろに仰け反り返った。
「死ねぇ！！」
しかし、それでもＬＥはくたばらない。
戦斧を受け止め、触手を首に巻かれた。
「しくじった…二番機！！俺の首に重装貫通弾を撃て！！」
「え！？それじゃあ何も見えなく…。」
「大丈夫だ！！脱出用前ハッチを開ける！！」
「わかりました！！…重装貫通弾装填。」

俺はガスマスクを装着するとハンドルに手をかけた。
「発射！！」
ズドンと音がしてウィンドウが消えた。
「うぉりゃあ！！」
ハッチが落ちるとＬＥの放つ腐臭に頭が重くなる。
「ガスマスクでも無理かっ！！」
狙いを定めて本体の下顎に刃を斬りつけた。
顎の骨が砕け、ＬＥは暴れ出す。
「クソッ…うっ…」
ＬＥの口から何体もの人間の死体が溢れ出た。
「おお…ちょ……ふせ…っ！！」
バリバリと音を立てるスピーカーから、西園寺の声が聞こえる。
その瞬間、もう一度貫通弾の当たる音が聞こえて、ＬＥの首が弾けた。

ビチャッと生々しい音がして
まだコアの残る頭部が地面に落ちてビクビクとのたうち回る。
「これで終わりだ…。」
ハンドガンを手に取ると、コックピットからＬＥに向けて１０発ほど発砲した。

「Ｌ…たいはんの…うしつ！！…せんと…終了。」
「こちら大場、戦闘終了命令を受理、これより帰還します。」
ガタガタになったベディヘルツから降りる。
不意にめまいの様な感覚に陥って
倒れこんでしまった。

紅の誓

「気がついたか？」
医務室の天井だろうか
俺の目の前に達巳が顔を出した。
「賢治、お前またムチャしただろう。」
「た、達巳か？」
「ああ、二日も寝て居て結構な事だ。で無茶したんだろ？」
「…しないでこんな所には居ない、って言っとこうかな。」
「ふ、大概にするんだな。俺たちはお前を信じて戦っているんだから、いざとなれば俺や工大や城崎先輩が助けに来る。」
「それは信じていいんだな？」
「ああ、１００％な。」

達巳はクイっとメガネを押し上げた。
「今回のＬＥは瘴気が強かった様だ。ガスマスク程度では身が持たなかったと言う良い実験になったと思えば、お前の行動は評価できる。」
「はは、酷い言われ様だな。」
「ふっ…事実を話すだけさ。今となってＬＥは瘴気にこだわり始めた。今までなら人間が数ｃｍ近づいてもまったく無害だったのにな。」
「…ああ、ＬＥは進化し続ける。いつになってもそれが止まる事はない。」
達巳はフッと笑って椅子から立ち上がった。
「俺たちも変わり続けなくてはならないってことだ。」
「そうだな。」

「じゃあ実験体さんはゆっくりやすみな。俺は一番機の調整に出る。」
「ああ、っそうだ達巳！！次の出撃予定は？」
「おいおい、お前、大丈夫か？」
「へ？」
「零番機、大破させておいて言うセリフか？」
「え…ああそうだな。は…はは。」
「ふっ…まったく…。じゃあな俺は行くぞ。」
「ありがとうな達巳。」
「いいって。」

ガラッと音を立ててドアがしまった。
「次は俺抜きか…朝蓋上官も頭抱えちゃうだろうな…。」
はぁっとため息をつくと、案の定朝蓋上官が姿を現した。
「おい…大場？大丈夫か？」
嗄れた声を上げ、上官は俺の寝るベッドに駆け寄る。
厳しい人では無いが、その厳つい顔から鬼上官と呼ばれている。
しかし、その厳つい顔も今ではなんの面影も無いくらい
心配そうな表情を浮かべていた。

「良かった…うちの部隊の誰かが死ぬなんて、俺はもう嫌だ…。良かった大場…。」
「上官…申し訳ございません。自分の安易な考えで部隊の荷を重くした事、反省致します。」
「そんな硬い事を考えるな…。お前が体を張って相手を倒さなかったら、城崎はおろか、新人の西園寺まで失ってしまったんだ。お前は二人を助けた。それでいいんだ。」
さすが部隊一ギャップのある上官だ。
それでいても俺は、上官のその一言が身に染みて嬉しかった。
こんな世界だからこそ、一所懸命に生きなければならないと、上官

は口癖の様に言う。
「お前が恋人を失って、失意のドン底に落とされた事は良く知っている。だからと言ってお前まで死んではいけない。彼女が悪人になってしまう。」
「そうですね。春海はそう望みますよね、絶対。」
「ああ、精一杯生きろ。ベディに乗る者として精一杯な。」
朝蓋上官は涙目になって言う。

「先輩！！大場先輩！！大丈夫ですか！！」
「あ、西園寺…お前こそ大丈夫だったか？」
「はい！！」
そう言って西園寺は朝蓋上官にぺこりと頭を下げてからディスプレイとカメラ、ヘッドフォン付きマイクをベッドに取り付けた。
「貴戸さんが、隊長の務めしなかったら隊長じゃない！！これで指令を送れ！！っとおっしゃって居たので、持って来ました。」
「貴戸がか…まったく、整備班の癖に部隊に首突っ込むなんて生意気だよな…。」
「これで僕も安心して戦えます！！」
「はは、そっか。ってことは今から戦闘か？」
朝蓋上官はコクリとうなづいた。
「今回戦闘するＬＥの形はウロボロスだ…。」
「ウロボロスって…最大級のＬＥじゃないですか！？…よりによって…。」
「先輩！！、でも大丈夫です…あの時とは僕たちは違いますから。」
西園寺の声は震えていた。

紅の誓

「今回の作戦はパターンαによる5機全機での掃討作戦とする…。」
ブリーフィングの電子音の様な音声がヘッドホンから聞こえる。
モニターには芝浦の通信と各機のウィンドウが見える。

「ウロボロスの対策はシミュレーションで出来て居るだろ？」
「…あ、ああ…でもS級クラスでさ、一度も勝てた事が無いんだよ…。」
「心配するな、僚機の選択が悪かっただけだ。」
「俺は…絶対あの時と同じ結末になんてなりたくない。」
「隊長がそれでどうするんだ！！俺が作戦を組む。だから落ち着け。」
「おう。」

病室は閑散としていて
まるで嵐の前の静けさだった。
芝浦との通信が切れて一旦ヘッドホンを太ももの上に乗せた。
どうやら瘴気の影響で足が麻痺して居るらしい。
間隔は戻って来ているものの、動かす事は出来ない。
零番機の改修もあと一週間はかかるというので、このままで行くとあと三回の戦闘はオペレーター状態になりそうだった。

「そろそろ始まるな…。」
俺は薬を飲み、一息ついてからヘッドホンを付けて、マイクを調整した。
「ベディヘルツ五番機、射出します！！」
五番機のモニターに続いて他の四機のモニターが明るくなる。
今日の天気は快晴。

大蛇に禍々しいほどの目玉と触手、そしてムカデの様に無数の人間の足がくっついているウロボロスの全景が見えた。

「捕食用の口腔部分は腹部が裂けて現れる、なお、寄生されて居る可能性もある為考慮せよ。」

「了解！！」

芝浦の声がヘッドホンから伝わって来る。

「コアの確定、不確定に問わず口腔部分と背骨に傷を負わせる事を最優先事項とする。」

「了解！！」

「戦闘開始！！」

触手の軌道を読み、五番機は日本刀を振るう。

全長６メートルのベディヘルツに比べ、その倍以上の１５メートルの巨体を持つウロボロスとの差は圧倒的と言われていた。

東京も、神奈川も、長野もこのウロボロスで堕ち、数週間前にこの部隊も三機が損失、三人のパイロットも喰われた。

しかし、今日の戦闘は何かが違っていた。

「四番機！！背面に回りエレキランスにて攻撃！！直ぐに散開し待機！！」

ウロボロスは唸りを上げ、背中を仰け反り、腹部を晒した。

俺は必至になってデータを解析し、コアを探した。

「芝浦！！コアはトグロを巻いている下半身にある！！」

「了解！！」

口腔部分に一番機と二番機が一斉射撃をした。

鮮血を吹き、急所に当たったのか、ついにはよろめいて足掻いてしまった。

「逝け！！」

五番機の刃がコアに狙いを定めたその瞬間だった。
ウロボロスの腹部の皮膚が破れ、刀の様に鋭い爪が出現した。
「避けろ芝浦！！」
ザンッ！！
と音がして、五番機の胴体は真っ二つに斬られた。
「芝浦！！芝浦！！」
応答も無く五番機の上半身は地に転がった。
「工大くんから離れなさい！！」
城崎先輩の叫び声と共に四番機がＬＥに突撃をする。
「やめろ四番機！！」
俺の警告も虚しく、四番機の首がもがれ、肩からコックピットすれすれまで斬られた。
「三機は五番機と四番機のパイロットを回収！！直ちに退却！！」
「了解！！」
二番機は弾幕を張ってまだ動かない敵の動きを封じ込める。
その間に芝浦と城崎先輩が回収され、退却した。

「ウロボロスが形態変化するなんて…。」
ベッドの中で動かない足が疼いた。

紅の誓

その後の経過から
ウロボロスと思われていたＬＥは変態を始め、
鎌の様な手を持つグロテスクな竜と成った。

新種のＬＥは町には侵攻せず、東京方面へ向かって姿を消した。

これでこの部隊も動けるベディヘルツが三機のみと成ってしまった。
いつまたあのＬＥが現れるかわからない。
あまりに強大な敵の出現に、部隊は大いに混乱していた。

「コアトル型、と名付けられた変態後のウロボロスだが、ここ一週間の報告に寄ると、秩父地区も北部地区も確認はされていないそうだ。こいつの特徴は鎌状の手から繰り出される強力な一撃である。移動方法は下半身に付いた無数の脚部。コアは胸から剥き出しに成って居てる、これはここにおびき寄せる為にわざと剥き出しにしたのだろう。背中を覆う皮膚は硬化し、殆どの攻撃は通用しなくなった。口腔部分は…不明。退化したか確認出来ない場所に移動したと見られる。」

ウロボロスとの戦闘から一週間後。
会議室のテーブルを取り囲んで、六人はモニターをじっくりと見つめた。
ウロボロスが変態すると言う事件に焦りを抱きながらも、まずは錯綜する情報を正確に認知するべきであると自己判断で行っていた。

「Ｌ公が、しかもあの蛇の野郎が変身やなんて…えらい恐ろしいこ

っちゃやなぁ…。」
東原は長い説明に伸びながら、愚痴を漏らす。
「だからと言って勝てない訳はないんですから、もう少し考えてみましょう？ね」
「有機…そんな事言うても、あんたもう飽き飽きしてんちゃうかー！！」
「しょうがないよ…僕らがやらなくちゃひとが死んでっちゃう。」
「せやけど…あー！！俺はもう飽きたー！！」

東原がウーウー唸って居るのを見ながら
城崎先輩がお茶にしようかと持ちかけて来た。
「慶人兄さんはわかるなー！！よ！！大統領！！」
「はは…修哉君はお調子者だねぇ。」
「うっ…それは言わんといてぇな…。」

自然と重い空気が晴れて
みんなの顔に笑顔が溢れた。
「じゃあ、休憩した後にオペレーターの人も呼んでみて、一緒に考えてもらうか。」
「はい！！」
「せやな。男祭りじゃむさ苦しいだけで進歩せぇへん言う事やな！！さすが隊長！！」
「…俺を悪者にしないでくれよ？」
「うう…寄ってたかって…。」

芝浦はいじける東原の肩を掴んで部屋を出た。
「それじゃあ僕らも行きましょう！！」
西園寺も立ち上がり俺達も部屋を出て行った。

廊下ですれ違った専属オペレーターの汐見に声をかけた。

「汐見、これからコアトル型についての作戦会議をしたいんだが、午後空いて居たら会議室まで来てもらえるかい？」
「あ、はい！！賢治さん。あえっと…朝蓋上官は午後お帰りになって、オペレーターの者も作戦会議等開く予定でしたのでよろしければご一緒に。」
「ああ、じゃあそう言う事ならちょうど良かったね。ありがとう汐見。」
「は…はい！！あ、えっと、ありがとうございます！！」
「ん？…じゃあまた午後。」
「はい！！」

汐見はブンッ
と頭を振り、走って行った。
「…？まあいいか。」
俺は休憩室に入ってコーヒーを飲む。

「遅くなりまして～あれ？修哉君、いなく無いですか？」
後から城崎先輩が入って来て、周りを見渡す。
「ああ、あいつならオペレーターのカズちゃんに捕まってるよ。」
芝浦が言うとなるほどなるほどと声が上がった。
「そっか…和胡ちゃんだよね、修哉君のオペレーター。」
「ふっ…ちゃきちゃきの京娘。だな。」
「そうそう、長話で有名な宇治和胡、通称カズちゃん。一回捕まる三時間くらい余裕にマシンガントークするって噂のね…。」
「ワコ？ってどう書くんですか？」
「和むの和に胡桃の胡。可愛い名前の癖に…なぁ。」

ドアが開いて東原が駆け込んで来る。
と同時に宇治の休憩室に入って来る。
「皆さん…聞いてください…。ウチのこと修哉はんは嫌いっていう

ねんで…。酷ないですかぁ？なんでもウチの話が長いから言うてそんなにウチのこと貶せんといてもええんちゃうかって言うたら、「俺はお前とは必要最低限の事しか喋らへん！！」って言うねん！！乙女の心を傷つけるくらいやったらＬＥはんのコアでも傷つけてくれやーって感じなんな…。せやけどまだ修哉はんは１６歳。ウチがちゃーんとオペレーターをやらんとあかんねん。それやのに！！それやのに！！」

「俺は１７やで！！パートナーの年齢も覚えられん奴に、命預けてどうすんねん！！」

「身長１５５センチで良く言わはるなぁ！！」

「なんやてー！！お前！！１４０センチしかない癖に！！」

「ウチは１４１センチですー！！」

「１センチしか違わへんがな！！」

「乙女の１センチを馬鹿にせんといてーな！！」

「１６歳でか？ごっつちゃちい人間やな！！」

「乙女の年齢言うんかいな！！乙女の敵！！」

「俺はお前のことだけ言うてんねん！！」

「はぁ…行こうか？」

「了解…。」

それから東原は午後の会議まで宇治と口論していたと言う。

紅の誓

朝蓋上官の報告に寄るとコアトル型が秩父地方で確認されたらしい。
戦闘データはなし。
相変わらず攻撃などはして来なかった。

「以上からして、コアトル型は戦闘の観察をし、学習する。幾多の戦闘から得た知識で確実に私達を追い詰めてくるだろう。」

と言うわけだ。
これ以降の変態は確認されておらず当分の間はこちらが戦いを仕掛けない限り交戦状態へ陥ることは無いが、その代わり後の戦いは確実に不利になる。

「朝蓋上官、私達が即座に倒すべきでしょうか？」
「うーん…こちらにもあいつの情報は全くないのが痛い。下手に手を出してここを堕とされる可能性だってあるんだ。」
「あの刀みたいな部分がメインウェポンとすると、僕らはその威力を体験済みだよ。どうやってあれを打ち破るかが鍵だけど、射程範囲もわかるし。」
「城崎…あのな。僕らだって今すぐでもあいつの息の根を止めるべきだって意見を優先したい所だけど。自分達の状態を考慮しなくちゃいけないんだよ。」
「ウロボロスとの戦闘データじゃ役に立ちませんかぁ～？」

達己の横のオペレーター、正丸優美が声を上げた。
「正丸…残念だがそれは難しい。」
「うう～…。」
変態前だからと言って同じ攻撃を取ることは無い。

外的な物より内的に彼らは変わる。
脳が膨張し学習能力はさらに増す。
ＬＥの恐ろしい所はそこなのだ。

「口腔部と背骨が弱点なんですよね。」
「ああ、そうだよ。だけど分厚い防御骨が発達して今じゃ前みたいにいかない。ランスかアックスが望ましいな。」
「アックスなら隊長と東原居るぜ上官。」
「じゃあ新型アックスの配備を求めるか。」
「新型アックスってなんですか？」

西園寺が体を乗り出す。
「有機ー自分のことやと思って聞いてもあかんちゃうんかぁ？」
「いいじゃないですか！！修哉君は喜ぶべきです！！」
俺も正直嬉しい所なのだが、そのアックスにはあれこれ問題が多いらしい。

「上官、それはダインスレイヴ改－７４じゃないんですか？」
「…やっぱり知っていたか。隊長の名は侮れないな。」
「なんですか？そのダインスレイヴって…。」
「ダインスレイヴは今はなきドイツのベルハルト社が作った重量級アックスで破壊力に引き換えスキがデカい。触手攻撃を取るようになったＬＥが出現してからは凍結されていた武器だ。」
「諸刃の剣ってことですねぇ～、データでは触手攻撃がサブに回ると考えられるので、どうでしょうかぁ？」

朝蓋上官の顔は険しい。
「正丸さん…サブでも絶対攻撃して来ないとは限らないですよ。」
「そうですよね…。」
八方塞がりの中で何も答えが出ないまま会議は終わってしまった。

「賢治さん！！」
汐見が後ろから追いかけてきた。
「賢治さん良くなって良かったです！！私凄く心配して…。」
「ありがとう汐見。君も忙しかっただろう？」
「いえ！！そんなこと有りません！！毎日賢治さんのお見舞いに…」
「ん…汐見来てくれてたの？」
「へ！？あ！！違います違います！！そのーえっとー行きたかったです！！そうです！！」
「あー、なるほど、ありがとう！！そう言って貰えて嬉しいよ。」
「はい！！ありがとうございます！！」
「う…うん。でどうしたんだい？」
「あ！！私賢治さんと良くなったお祝いに何かしてあげたくて。」
「じゃあ…考えておくよ。ありがとう。」
「はい！！ありがとうございます！！ではっ！！」
汐見はブンっと音が立つくらいに頭を振って走り去って行った。

紅の誓

それから一ヶ月が過ぎた。
零番機、四番機、五番機が改修され戻ってきた。
ダインスレイブの件も纏まり、つい三日前に二つがここに運び込まれた。
コアトル型は依然、姿だけを晒しては逃げてばかりだった。
次回の戦闘でダインスレイブを使いコアトル型を攻撃する予定も立てた。

しかし

「大場！！」
「木戸じゃないか？どうした？」
「浦和の奴らがコアトルに喰われた！！」
「な…本当か！？」
「ああ、本日早朝に出現したコアトル型が第五管区の研究所を襲撃。浦和第三小隊との戦闘開始3分後に突如として部隊に攻撃を開始、３６秒で四機は大破、パイロットは捕食された。だってさ。」
「残り二機は…。」
「ベディヘルツごと捕食…。」
「は？ベディヘルツごと！？」
「ああ。」
「ＬＥは機械なんて捕食しないぞ！！」
「そうなんだがな…。」
「なんの為にベディヘルツが作られたと思ってるんだ！！」
「…とりあえず俺は整備室に戻る。」

木戸はセルウィを胸ポケットにしまい込むと
急いで整備室へと走って行った。
「ひとまず俺も戻ろう。」

四機を瞬殺し、強引にベディヘルツをも捕食したコアトル型。
恐怖の噂はすぐに基地全体に広がった。
「賢治さん！！」
廊下の右から汐見が飛び出してくる。
どうやら俺を探していたようで、
何を言いたいのか良くわからないが、あたふたと手を動かしていた。

「とりあえず落ち着きなよ。どうしたんだいったい。」
「さっき入った情報で、コアトル型が浦和基地を襲撃しました！！」
「な…それで！？」
「基地内の人間を捕食。東京側に消えたそうです。」
「…ついに本格的に侵攻が始まったみたいだな…。」
「第一防衛ラインも後退。東部の部隊には第五種緊急戦闘指令が下りました。」
「…っ…いつでも死ねる用意をしておけって事かっ！！」
「…賢治さん…。」
「命令には逆らえないということだ。汐見、なんとかして俺達がコアトルを倒すぞ。」
「はい。」

ドタバタと荒れる基地内を二人で歩いて行く。
いつ相手が現れるかたまったものじゃない。
とりあえず、上官をあたるのが一番だ。

汐見もわかっていたのか
俺が廊下を右に曲がるとコクリとうなずいた。

「大場！！僕もちょうど君を探そうとおもって居た所だ！！よかった。」
「はい、では現状どの様な風に。」
「ああ、東部の守りを固める為に東部の部隊で残っている八部隊を任意連合させるということだ。」
「なるほど、任意連合という事は辞退をする部隊もあると？」
「ああ、僕達はどうするか決めては居ないけど、東部連合部隊が発足し、この川越部隊がなくなった場合僕は指揮官を辞める。」
朝蓋上官の目は遠くを見つめて居た。

紅の誓

三日が経った
基地内に怒号が響いた。
俺と汐見は上官の部屋へ向かった。

「朝蓋じょ…うかん…？」
「どうしてそんな弱腰なんですかっ！！」
「工大！！やめろ！！」
「うるせぇ！！上官だろうとなんだろうと知ったこっちゃねぇんだよ！！」
「芝浦…すまない。」
「すまないですみゃ俺達はいらねぇんだよ！！なんでだよ！！」
「おい芝浦！！なにやってんだ！！」
「…隊長。朝蓋上官、俺達を東部連合部隊に出さないんだとよ。」
「それがどうした。」
「それがどうしたじゃねぇよ！！俺たちゃ用なしかよ！！」
「わけがあってそうしたんだろ！！どうして自分達を東部連合部隊に出さないのですか？」

朝蓋上官はくしゃくしゃな顔を上げた。
「僕はお前達を殺したくないからだ。」
「…此処で野垂れ死にさせたいのかよっ！！」
「やめろ！！芝浦…。」

うーっと唸る芝浦を俺と達巳が抑える。
汐見はおろおろして泣き出しそうに口を手で隠した。

「っち！！わかったよ！！わかりました！！…。」
「…。」
ドアを開けて芝浦が出て行ってしまった。
朝蓋上官は情けないなと言い、椅子に座った。
「上官はまだあの事を根にもっていらっしゃるんですか？」
「…あ、あの事って…なんですか？」
「あの事って言うのは…。」

「いい、大場…汐見くんは初めて聞くかもしれないから教える。」
そうして朝蓋上官は堅い口を開いた。

「この部隊は元々複数の部隊から出来たものだ。」
「え？…でも。」
「埼玉にウロボロスが現れた時だった。」

それは俺がまだ普通の隊員だった頃の事だ。
芝浦と達巳の三人と隊長、副隊長、そして倉敷という隊員の三人で埼玉に現れたウロボロスを倒しに出撃した。

いきり立つ芝浦はウロボロスに飛びかかるが、あっけなく倒されついには捕食されそうになってしまった。
そんな時隊長が芝浦を守るため、自ら芝浦の盾となり捕食された。
その隙を突いてたじろぐ三人を尻目に副隊長が背骨に一撃を与えたが抵抗され捕食されてしまった。

「僕が行く…みんなは逃げろ！！」
そう言うと倉敷は自ら自爆装置を起動させウロボロスと共に自爆してしまった。

その後他の部隊で同様に仲間を失った東原と西園寺が入隊し、一ヶ月後に城崎先輩が入って来た。

城崎先輩は元隊長の知識量を駆られ入隊したのだが、頑なに隊長になる事を拒否し、俺が隊長となったのだ。

「…その三人が居た部隊の副隊長が僕の唯一の子供だった…。幹也が死んでもなお、僕は君達隊員の一人一人を大切な子供同然に扱っていた。それに、毎回君達を戦場に出す事が嫌でならなかった…。そして死んで貰いたく無かった。そんな事では指揮官が勤まる訳無い、命令を振り切り三機大破させた君達の勇敢さをみてもなお。だから君達を東部連合に入れるのを躊躇い、僕は指揮官を辞める事になった。」

思いの丈を目一杯話し終えると
フーッと息を吐いてこちらを向いた。
「…すまんな、僕のワガママで、君達は君達なりの生き方があるのにな。」
「上官。自分は上官の行為に大変感謝しています。多分これは芝浦だって他の隊員だって同じです。」
「…。」
「ですが、それは自分達の存在意義に反します。上官のおっしゃる通り、自分達には自分達の道があり自分達はＬＥを殺す為に戦う兵士なのです。」
「大場…」
「それが現実で自分達の意思です上官。」
「…そう、か。」

机の上の書類に上官はサインをした。
「大場…東部連合部隊は此処より西の坂戸市に本部が置かれる事に

なった。実質ここは廃止される。」
「…そうですか、移動はいつですか？」
「今日手続きが受理されて二日後だ。」
「それまでにＬＥが来なければいいですがね…。」
「ああ、ベディヘルツの搬出が一緒の日だからな。物品も暇を見て搬出する予定だ。」

「わかりました。ではみんなにそう伝えておきます。」
「ふっ…芝浦も俺も賛成した案件だったし、東原も西園寺も城崎先輩も賛成した。異議のある奴はいないさ。」
「…そうかならいい。朝蓋上官、ご決断ありがとうございました。汐見、君はついて来てくれるか？」
「へ！？わっ私は賢治さんが来いと言うのらついてゆきます！！」
「僕は悲しいけど、やっぱり嬉しいよ。絶対に死なないでくれよ。」
「はい。」

俺達が部屋を出ると
朝蓋上官は電話の受話器を取った。
「予備を起動出来るようにしておいてくれ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9011w/

ーBegierde BeilHzー（殉欲のベディヘルツ）

2012年1月13日23時51分発行